



シドニー五輪、アテネ五輪と女子ソフトボール日本代表チームを率いた宇津木妙子監督（中）。厳しい指導で知られる「宇津木スタイル」の根底には、選手一人ひとりを見つめ、ともに走り続ける指導者の信念があった

年間連載

Yamaha Philosophy

トークマイドラマ

元女子ソフトボール日本代表監督

うづき たえこ
宇津木 妙子さん

「努力は裏切らない」「練習は裏切らない」。この言葉をこれまでに何度、自分自身や選手たちに言い続けてきただろう。女子ソフトボール日本代表監督として「オリンピックで金メダルを取る」という高い志を掲げるはるか前から、私は自分の限界に挑み続けた者だけが、未知なる高みを制すると知っていた。自分は決してエリート選手ではなかったので誰よりも長く練習してきたし、実業団の監督になってからはチームの選手たちをとことん追い

込み、全員でリーグの階段を駆け上がったものだ。私の指導はハンパなく厳しかったと思う。日本代表の選手ですら「これ以上やったら死ぬ」と音上げるほどに。

1997年11月27日に日本代表監督への就任要請を受けてから、2004年8月22日アテネ五輪での最後の戦いを終えるまでの7年間、私たちは世界一を目指し、死に物狂いで練習を重ねてきた。しかし、手に入ったのは銀メダルと銅メダル。ソフトボールのことだけ考

えて走り抜いた日々の果てに、何より欲しかった金メダルを手にするには、ついにできなかった。

あれから10年以上の時間が過ぎた。今、こうしてあの時の悔しい思いを振り返りながら、私は性懲りもなくこう言おうと思う。それでも、「努力は裏切らない」と。限界に挑み、最後までやり切った者だけが勝利する——それは、紛れもない真実なのである。

限界を超え、 自分たちの“金メダル”をつかめ!

■ チームとは何か

中学生でソフトボールと出会ってから18年あまりの選手生活と、その後の30年に及ぶ指導者生活。私にとってソフトボールはまさに人生そのもので、人として必要なことも、指導者として貫いた哲学も、全てはソフトボールを通して培ったものである。自分を律すること。相手の立場に立つこと。率先垂範。公

平で厳正な評価。私の指導スタイルは時に、「競技以外の面で厳しすぎる」と批判を浴びることもあったが、私は、選手である前に人として誠実であることを何よりも重視した。その原点は、自分自身が高校一年生の時に引き起こした“一週間の休部事件”^{39歳}に遡る。

私と同世代の人なら容易に想像できると思うが、50年前の高校運動部には、今では決して通用しない理不尽な

しごきが横行していた。先輩の言うことは絶対で、口答えなど一切許されない。雑用を押し付けられたり、必要以上に厳しく指導されることは我慢できたが、ボールや道具を隠すような陰湿なイジメには納得がいかなかった。ある日、ついに我慢できなくなった私は「いいよ、みんなが私と同じ意見なら、一年生を代表して抗議してくる」と一人で三年生の元へ向かった。幼いころか

PROFILE

1953年、埼玉県生まれ。

中学でソフトボールを始め、1972年より実業団のユニチカ通井ソフトボール部に所属。1974年には最年少で世界選手権に出演。1985年に現役を引退後、日本リーグの日立高崎(現ビックカメラ女子ソフトボール高崎)の監督に就任。リーグ初の女性監督として、当時3部だったチームを2年後には1部に昇格させた。1997年、日本代表監督に就任。2000年シドニー五輪で銀メダル、2004年アテネ五輪では銅メダルを獲得。2005年には、日本人女性として初めて国際ソフトボール連盟殿堂入りを果たした。現在はビックカメラ女子ソフトボール高崎チームのシニアアドバイザーの傍ら、公益財団法人日本ソフトボール協会副会長、NPO法人「ソフトボール・ドリーム」の理事長として、なおソフトボールの普及に努めている。



ら曲がったことが嫌いなたちで、この閉塞した部活動を何とかして変えたいと強く願っていたのだ。

しかし、結果は散々だった。私が意見した翌日には一年生全員が集められ、先輩たちからきつく説教された。私の反抗に対するペナルティーは厳しく、説教は深夜まで続いた。すると、一年生の一人が体調を崩して救急車を呼ぶ事態となり、学校側にもこの騒ぎが知られてしまった。先輩たちの態度はより硬化し、翌日からのしごきはますますエスカレートした。

「三年生のやり方はひどすぎる。一年生全員が学校を休むことで、先輩をこらしめよう。どんな経緯でこのような計画が持ち上がったのかは忘れてしまったが、私はこのぐらいしなければ部は変わらないと思い、翌日から学校に行つたふりをして個人練習をするようになった。田んぼ道で走り込みをし、神社の壁にボールをぶつけてキャッチングの練習をする。ほかの一年生も同じように頑張っていると思って孤独な練習を続けていたが、後で聞いたら、実際に学校を休んだのは私一人だけだったようだ。」

一週間たって校長先生が「宇津木、お前がいなくてチームにならないから帰ってこい」と迎えに来てくれた時、私はようやく分かってもらえたと思った。自分は必要とされていると喜び、いそいそとソフトボール部の顧問の元へあいさつに行くと、先生は厳しい顔で「何をしに来たんだ」と言った。「お前のせいでみんながどれだけ迷惑したか。チームはお前一人じゃない。勝手な行動は許さない」。呆然と立ち尽くす私に下されたのは、1カ月間、練習前の準備など一年生の仕事をたった一人で行うことと、皆が練習をしている間、グラウンドの草むしりをするという厳しい罰だった。

その日から、私は授業が終わると急いでソフトボールの道具をリヤカーに積んで運び、グラウンドにラインを引いてみんなの到着を待つようになった。練習が始まれば隅っこに下がって、黙々と草むしりをする。一人だけ練習できない惨めさは相当なもので、みんなが生き生きとプレーする様子を見ないように、ずっとうつむいて、耐えた。

「私は悪くない」。そう思うと、怒りが込み上げた。当初、怒りの矛先は先輩たちや私を裏切った同級生に向かったが、次第に、私が休んでいる間に彼女たちが一連の騒ぎの責任を追及され、大変な思いをしていたことが分かった。今度は「何てバカなことをしたんだろう」という後悔ばかり湧いてきた。チームとは何か。人として誠実であるとはどういうことか。これらを本当の意味で理解していなかった自分に腹が立ち、泣きながら草をむしったことを覚えている。

後年、私は日本代表監督としてトップ選手たちを指導することになるが、「エースだからといって特別扱いたくない」というルールは、この時の辛さの中から生まれたものである。チームは誰か一人のためにあるのではない。エースも補欠も全員が自分の役割を果たすことで、初めてチームは生きるのだ。これは、50年に及ぶ私のソフトボール人生の土台となる考え方である。

■ 高き志を胸に抱いて

私に日本代表監督への就任要請が来たのは、1986年から監督を務めた実業団3部リーグの日立高崎（現ビックカメラ女子ソフトボール高崎）を2年で1部リーグまで昇格させ、1997年には日本リーグ、全日本総合選手権、国民体育大会の三冠に導いた功績を評価されたものと思う。監督を引き

受けるに当たり、私は一つの条件を出した。「結果に対する全責任を負う代わりに、日本代表に関わる全権を委任してほしい」というものだ。直前のアトランタ五輪では船頭が多すぎて選手を混乱させた反省もあり、一部に異論はあったが、最終的に私の要求は受け入れられた。

監督として最初に行ったのは、目的(志)の共有とルールの徹底である。「シドニーで金メダルを取り、ソフトボールをメジャースポーツにする」という志を集まった22名と確認し、次にそのためには何をすべきか、選手一人ひとりに考えさせた。なぜなら、目的意識のない練習など何の効果も上げないからである。取り組む意味を考えず、ただ体だけ動かそうとしてもしんどいだけだ。そもそも、そんな甘つちよるい指導を行う気は私にはさらさらなかった。

シドニーまでの3年間に、私たちは100日を超える強化合宿とたび重なる海外遠征など、質・量ともに世界一の練習を積んだと自負している。どれもきつい練習だったが、中でも2000年1月に行った台湾での強化合宿は、今も「地獄の合宿」として語り継がれているという。

合宿メニューの柱は、「守る」「打つ」「投げる」という徹底した基礎練習とランニング。午前中は一対一の個人ノックや実践さながらの全体ノック、選手が走って守備位置を変えながら受けるアメリカン・ノックなどを織り交ぜ、3時間にわたって選手たちを追い込んだ。1時間の休憩を挟み、午後はポジション別の練習に切り替える。ピッチャーには真ん中・インコース・高め・低めにテーブを張った的に向かって300～500回の投球練習をさせ、野手には素振り1,000本と徹底的な打ち込みを命じた。最後は、サーキット・トレーニ

トークマイドラマ

ング。「空気いす」と呼ばれる筋トレを織り交ぜたトレーニング・メニューはかなりきつく、これが終わると、どの選手も「これ以上は無理!」とグラウンドにへたり込んだ。これを10日間、休みなしに続けたのである。

なぜ、これほどきつい練習をさせたのか。もちろん、シドニーで金メダルを取るためだ。私には「守りに守って相手のミス誘い、1点取れば、その1点を守り抜いて勝つ」という明確なビジョンがあった。だから、徹底的に守備力を磨く練習を中心に、ピッチャーには制球力、野手には打率を上げる練習を行わせた。もし選手たちが全くの受け身で、自分の練習の意味も分からず参加していたのなら、恐らく、合宿は2日ともたなかっただろう。そのくらい、「自分にとって、今、何が必要なのか」を考え、「集団と個人」という視点から自分のすべきことを理解することが重要なのである。

もう一つ、監督として心掛けたことがある。それは、選手一人ひとりの状態を正確に把握することだ。当時の日本代表には、アキレス腱やひざに爆弾を抱えたベテラン選手もいた。私は全員を平等に追い込むことを信条にしていたが、彼女たちに疲れが見えると、わざと



選手一人ひとりに向き合う指導風景(左)



シドニー五輪で、銀メダルに輝いた日本代表チーム。マスコミには、「限りなく金メダルに近い銀メダル」と評された

絶対に取れないコースに球を打ってミスした格好にし、「お前、何やってんだ。罰として立ってろ」と罵声を浴びせて休ませたりもした。故障させたら元も子もない。指導者には選手一人ひとりと向き合い、彼女らが今どういう状態なのか、何を考えているのか、心の内までしっかり理解する責任があると思う。

■ 選手が教えてくれたこと

こうして迎えたシドニー五輪は当初、私が思い描いた通りに展開した。リーグ戦は7戦全勝。特に3戦目のアメリカ戦では、事前にタイブレーカーまで想定して行った練習がまんまと当たり、ついにアメリカから30年ぶりの勝利を挙げる事ができた。鉄壁の守備と打たせて取るピッチング。最高の気分で決勝トーナメントに進み、準決勝でもオーストラリアに競り勝った。しかし、決勝ではアメリカにまさかのサヨナラ負けを喫し、金メダルには一歩及ばなかった。

試合後、直接の敗因となったエラーをした選手が、いつまでも更衣室から出てこない。優しい言葉を掛けるより、普段通りきつく接した方がいいと思った私は「いつまで泣いてるんだ。お前のエラーで負けたんだろ」と怒鳴った。す

ると、ほかの選手たちが全員、私に喚びかかってきた。「一人のエラーじゃない。みんなのエラーだ。すったもんだの末に選手たちが閉会式へ向かい、無人になった更衣室で、私は「何という素晴らしいチームだろう」と思った。そして、選手たちから教えられる指導者の幸せを知った。

■ 「責任を取る」という仕事

シドニー後も私は代表監督を続投したが、アテネ五輪までの道のりに語るべきことは少ない。辛いことだが、むしろ五輪終了後の出来事の中から、責任を取るという指導者にしかできない仕事について話そうと思う。

シドニーで銀メダルを取り、今度こそ金メダルと期待されて臨んだアテネ五輪。結果は銅メダルだった。帰国した成田空港では、迎えてくれた協会関係者から「おめでとう」という言葉は最後まで聞かれず、代わりに投げられた「(こんな結果で) 恥ずかしい」という言葉が私の胸を突いた。その後、開かれた強化委員会の反省会では、2時間にわたって五輪の結果を責められ続けた。なぜ、あの選手を起用したのか。なぜ、あの場面で打てなかったのか。

全ては終わってしまったことであり、私にできるのは頭を下げ続けることだけだ。最後まで「全ての責任は私にあります」と言い切ったけれど、終わった瞬間、涙が込み上げてきて、トイレに駆け込み声を殺して泣いた。

この4年間は一体、何だったんだろう。あんなに頑張ってきたのに、なぜ、私たちの努力は報われなかったのだろう。

冷徹な事実として、努力すれば夢はかなうというはおとぎ話である。特にスポーツの世界では、どんなに努力しても勝てないことはたくさんある。だが、そういう点も考慮した上で、やはり私は「努力は裏切らない」と結論付けた。アテネで金メダルを取れなかったのは、私の努力が足りなかったからである。

今、冷静に振り返ってみると、シドニー以降、急激にマスコミの注目を集める中で、私はどこか自分を見失っていたように思う。SARS騒ぎで海外遠征ができなかったとか、選手が相次いで体調不良を起こしたとか、確かに運もなかった。しかし、それを言い訳にして、練習をしたつもり、練習をしたふりをして自分の迷いをごまかしていた気がするのだ。選手たちは本当に頑張ったが、私の覚悟が足りなかった。そう結論付けて、私は日本代表監督を辞任した。

2008年8月21日、北京五輪の女子ソフトボール決勝で日本はアメリカを破り、悲願の金メダルを手にした。その様子を私はテレビ解説者としてオリンピックスタジアムの放送席で見ただけだが、表彰式でエースの上野^{ウノ}が私に向けて金メダルを掲げ、「監督、取ったよ、取ったよ、取ったよ」と3回言った時、「ようやく夢がかなった」という想いで胸がいっぱいになった。「金

メダルを取り、ソフトボールをメジャースポーツにする」。シドニーから北京までの12年を経て、ソフトボールは確かに、日本中に夢を与えるメジャースポーツになったのである。



日本のエース上野由岐子投手(左)に金メダルの夢を託した

■ 終わらない挑戦

今、私はNPO法人「ソフトボール・ドリーム」の理事長として、北京を最後にオリンピック種目から外れたソフトボールの復活を目指す活動^{※1}と、ソフトボールを通じた青少年育成活動を続けている。五輪復帰に向けた活動では何度もめげそうになったが、そのたびに、福島県の中学生からもらった「私の夢はソフトボールでオリンピックに出場すること」という言葉を思い出し、

まだまだ頑張らなきゃいけないと思っている。

「努力は裏切らない」と信じて走り続ける私の原動力は、容易に夢がかなわないことへの悔しさである。ユニチカでは、なかなかレギュラーになれなくて悔しかった。日立高崎の監督時代には女監督への反感やマイナースポーツへの無関心が本当に悔しかった。正直に言うと、北京五輪で日本チームが金メダルを取り、歓喜の涙を流した時でさえ、心のほんの一部には「どうして私が監督の時じゃなかったのか」という悔しさがにじんでいた。人間の心はきれいごとばかりじゃない。でも、だからこそ、人は頑張れるのではなからうか。

努力が形にならない時、周りがなかなか認めてくれない時。実はその時こそチャンスなのである。悔しさや醜い気持ちを抱く自分を恥じることはない。安心して自分なりの挑戦の道を探し、自分だけの金メダルを手にしてほしいと思う。

※1 上野由岐子:ソフトボール投手。アテネ五輪、北京五輪の日本代表エース。北京の決勝トーナメントでは、2日間で3試合413球を投げ抜き、日本の金メダルに貢献した。

※2 2016年8月3日、国際オリンピック委員会の総会で「2020年東京五輪での野球・ソフトボールなど5競技18種目の追加」が正式決定され、宇津木さんの長年にわたる挑戦が実を結んだ。



ヤマハ野球部の健勝を願い、宇津木さんから毎年贈られる必勝だるま(野球部成隊者のトレーニングルーム)